



説明力を身につけよう

京都女子大学 発達教育学部 教育学科 教授 井上一郎さん

昨今、新学習指導要領の実施に伴い、子どもに「説明する力」「説明力」を求める機会が増えていきます。では、その「説明力」とはいったいどのようなものなのでしょうか。今回は、著書『誰もがつけたい説明力』等の中で、説明する力の大切さを説いておられる京都女子大学の井上先生に、「説明力」とは何か、またそれはどうすれば身につけられるのかなどをお伺いしました。

今、必要だと いわれる 子どもの「説明力」

近年、必要性が高まっている、「説明力」とは、どんなものでしょうか。まず、話し言葉、すなわち音声言語における「説明」について考えてみましょう。

たとえば、お医者さんや看護師さんが、患者さんに薬の飲み方を説明することがありますね。これは、事実をありのままに説明する、説明書と同じような役割です。何ら変わったことでは

ありませんね。こういった単純な説明には、私たちは、日常生活で頻繁に出合っています。つまり、ここでわかるのは、説明をするという行為は、特別な人でなくても行う、当たり前のことだということです。

では、説明することをもう少し広げて考えてみます。

説明力には、大きく分けると3つの表現様式が必要だとされています。目的に応じた説明の様式を意識することが説明力を高めることにつながります。

いのうえ・いちろう

奈良教育大学助教授・神戸大学教授を経て、2001年4月より文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官を勤める。2008年10月より、京都女子大学発達教育学部教育学科および大学院で教鞭を執る。著書に、『誰もがつけたい説明力』明治図書、『話す力・聞く力の基礎・基本』明治図書などがある。



ひとつは記録する力。英語で言うと「report」メモなどを含む、事実の単純な記録です。2つ目は「explain」。そのまま、説明するという意味です。3つ目が「narrate」語るということです。なかでも、一番の要であり、もっとも多く使われる様式が2つ目の「説明する」になります。「説明する」ことは、あらゆる場面において、人間の言語表現の主要な部分を占めています。説明力がないと、生活をしていくうえで非常に困ります。たとえば、薬の飲み方、パソコンのマニュアルや使い

方、一般にハウツーと呼ばれるものはすべて説明の一環です。ちなみに、もう少し話し手や書き手が前面に出てきて意見を言うようなものは、解説と言います。野球解説、ニュース解説などを行う人たちは、説明力を駆使しています。

また、小学生が書く感想文や、意見文、大学生が書く小論文など。これらは、自分の意見を読み手にわかってもらうための説明文です。

新聞の評論や論説も同様です。こういう種類のものは、自分の意見の表出です。だから、きちんとわかってもらえるように書くためには、表現能力、説明力が必要ですね。どう書けばいいのか、その様式をわかっていなければ書けるものではありません。

ここで、確認しておきたいことがあります。それは、説明力には3つの力があるということです。

ひとつは、説明を話す力。もうひとつは、説明文を書く力。そして説明文を読む力です。3つの領域にまたがっていますが、話し言葉や書き言葉だけでなく、説明文を読む力もまた、説明力です。なぜなら説明力がない人は、

説明文を読んだ時に、筆者の工夫がよくわかりません。だから、説明力を身につけるためにはまず、読まなくてはいけないし、書かなくてはいけないし、話さなくてはならない。そして、やはり書くとなると、なかなか難しい。第三者が読んで理解できるものとなると、特にそうです。だからこそ、様式に従って書くことが大切になります。

様式に従って書くとは、どういったことでしょうか。

では、ひとつ例を挙げます。去年カナダに視察に行った時のことです。現地の学校の教室で、興味深いポスターを掲示しているのを目にしました。

それは、「Major Forms of Writing」と書かれたポスターです。Formsは様式、つまり、書くということの主な様式、書式が書かれているものです。

そこで紹介されていた書く様式は、Narrative、Produce、Report、Expositionなどの6種類。つまり、このポスターを教室で見続けることによって、「これだけの種類の説明文の様式を、書き分けられるようにならなくてはいけない」ということが、自然と

子どもの頭に入るので。そして、書く時、話す時に自然に意識ができるようになっていきます。

もうひとつ、重視されているのが「The Writing Process」です。諸外国で重要視されている「書く力」とは、この「プロセス」を意識できるかどうかという点。そして、先ほどから出てきている「様式」を意識できるかどうかです。「様式」に従ってWriting Processをたどれるかどうか、世界的に、学力の大きなポイントなのです。現在の学習指導要領などで問われているのも、実はこの力なのです。

だから、こういった力を身につけるべきことを念頭において、学習を進めます。たとえば理科なら、調査報告を書くという学習があります。つまり、調査報告書という様式の中で説明力が必要になるということです。

様式化しないと物事の理解というのは進みにくいものです。一度書いたことがあって、「調査報告書を書く」のであれば、書きやすければ、唐突に何でもいから調べたことを書け、ということになると、どう書けばいいんだ、という話になります。様式、書式

がわかっていれば書きやすいし、読み取りやすいのです。

しかし、日本の子どもは、この様式を読み取るのが苦手です。文章にまともなものは別なのですが、情報が散らばっている中から、自分で組み立てながら情報を整理して読み取るのが、とても苦手なのです。

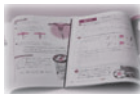
小学生が、国語以外のところで説明力を求められるのは、例えばどんなところでしょうか。

5年生の理科の教科書に出てくる課題があります。章の最後に「ふりかえろ」という単元のまとめがあります。ここには、イチゴの温室栽培でハウスの中にミツバチを放している理由を説明しよう、という問題が書いてあります。しかも、5つ、入れなくてはいけない単語まで、簡単に書けば「ミツバチが動けば受粉するから」ですんでしまっけれど、それだと「説明になっていない」「説明不足」といわれます。「先生、わかってくれるでしょ」では認めてもらえません。阿吽の呼吸を期待しては駄目。なぜ、ミツバチが動くか、と受粉し、実がなることができるのか、

その理由をきちんと書けないといけないのです。

「説明力」というと国語の問題のように思いがちですが、これは、どこでも求められる力になってきているのです。本当に、説明力が身につけていない子どもは、あらゆるシーンで困るようになってきています。

そして、実はこれが、大人になると要求されるようになる、「プレゼンテーション能力」にもつながります。「プレゼンテーション能力」というのは、つまり説明力のことなのです。



説明が問われている理科の教科書

説明力を身につけることは読み取る力にも関連する

説明力には、説明文を読み取る力も含まれるんですね。

もちろん、読む場合も同様のこと

言えます。

たとえばポスター。1枚のポスターに何が描いてあるのかを読み取る力は、かなり幅広い力が必要です。なぜなら、必要な事柄を、文章や文章以外の事柄から読み取っていかなくてはならないからです。

読み取りに必要な力を、リーディングストラテジーといいます。意味は、読むための戦略、自分の経験と結びつけるなど、工夫をして理解しようという、今まで読んだ本や実際の経験と結びつけたりする方法です。そうすることで、解釈はより深まります。

ここに「ロージーのおさんぼ」という絵本があります。その表紙を見て、タイトルを見れば、今まで読んだものや現実社会とを結びつけて、内容を推測することができますよね。



ロージーのおさんぼ (備成社)
著: パット・ハッチンス
翻訳: わたなべ しげお



主人公はロージーっていうのかな。表紙の絵に描かれているのがロージーなのかな。そうして考えれば、「主人公のロージーが外へ出かけていくことで何か事件が起こる話なんだな」という予測が成り立ちます。説明を読み取る力が備わっているならば、その辺りまでは読み取れるはずですよ。

それから、筆者の判断や意図も読み取ることが出来ます。小学生の国語の教科書に、「ありの行列」を扱ったものがあります。筆者は、いきなり本題から入ります。それは筆者が、小学生でも、ありがどんな虫かは理解しているだろうと判断したからですよ。

しかし、かつて「カプトガニ」を扱ったものがあつたのですが、その話では、一番最初にていねいなカプトガニの説明が入ります。それは、カプトガニとは何かという大前提をまず伝えなといけないからですよ。

たくさん説明があるということは、「わからないだろうな」と思って筆者が書いているということですよ。未知のものを既知のものにする作業を行っているのですよ。そうしなければ、伝わらないからこそその工夫があるということ

とも読み取ってほしいと思います。

説明力とは、受け取り手がどういふ人かをはつきり把握してないと発揮できません。そういう意味では、説明力を身につけるのは、難しいことです。結局は、いろいろなところに細かく気を配れる人でなければ、説明力のある人にはなれないかもしれません。

家庭生活の中でも説明力は鍛えられる

子どもに説明力を身につけさせるために、親御さんができることはあるでしょうか。

もちろん、あると思います。まずは学習面。子どもが文章を書く機会にはきちんと書けているかどうかを見てあげてください。調べるのを手伝ったり、文章の推敲を手伝ったり、理科や算数の教科書を一緒に読んで、記述を求められる部分をチェックしたり。

要するに、意識するだけで、随分違うということなんです。なんとと言っても、基礎学力の向上は、ラーニングスキル（学ぶ力）を身につけるところから始まりますから。

次に、日常生活の中でできることで

す。とにかく、日々のコミュニケーションの中で、きちんと会話をするのが大切ですよ。

たとえば、電車の中で騒いでいる時に「静かにしなさい！」とひと言叱って終わりでは駄目。「周りの人に迷惑だから静かにしなさいといけないよ」と、きちんと理由を言って話すこと。もちろん、常にというのは無理でも、できるだけ、きちんと会話をする機会を増やしてほしいですね。少し心がけるだけでまったく違います。

成長して世の中へ出たら、阿吽の呼吸ではやっていけない相手ともコミュニケーションを取っていかなければなりません。その時に自立した大人同士の会話ができるようになるためにも、きちんとした会話のスキルは必要だと思います。

そういう意味では、子どもに一人で買い物をさせることも有効かもしれません。店の人に、自分はどうなものが欲しいのかを説明し、それが置いてある場所を聞く、そんなちよつとしたところに、説明力アップの秘訣が潜んでいるのだと思います。